一乗谷朝倉氏遺跡

一乗谷川水辺空間整備計画に伴う事前調査報告

1991.3

福井県立朝倉氏遺跡資料館

例　　言

1．この報告書は、平成２年度に、一乗谷川の水辺空間整備事業の許可に先だって、福井市城戸ノ内町、同安波賀町、同東新町において実施した発掘調査の報告である。

2．調査地が、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の指定地とその隣接地であるため、発掘調査は、福井土木事務所の委託を受け、福井県立朝倉氏遺跡資料館が実施した。

3．発掘調査は、資料館の主任文化財調査員水野和雄、主査岩田隆、同吉岡泰英、同南洋一郎、同佐藤圭、文化財調査員月輪泰があたった。

4．報告書は、Ⅱ・Ⅳと、Ⅲの遺構を水野が、Ⅰと、Ⅲの遺物を月輪が執筆し、月輪が編集した。

5．調査の実施にあたっては、福井土木事務所・福井県教育庁文化課等関係者はもとより、吉川実明氏・三ツ屋博一氏をはじめとする地元の方々、発掘や整理を担当した作業員から多大な理解と協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

目　　次

頁

はじめに

Ⅰ．遺跡の概要 …… 1

Ⅱ．調査に至る経過 …… 2

Ⅲ．発掘した遺構と遺物

第１トレンチ …… 3

第２トレンチ

第３トレンチ

第４トレンチ …… 4

第５トレンチ

第６トレンチ …… 5

第７トレンチ …… 7

第８トレンチ …… 9

第９トレンチ …… 10

第10トレンチ

第11トレンチ …… 11

第12トレンチ …… 12

第13トレンチ …… 13

第14トレンチ …… 14

Ⅳ．まとめ …… 17

はじめに

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の環境整備事業は、昭和42年度から開始されており、これまで館や武家屋敷・寺院・町屋などの主要な発掘遺構が保存整備されています。整備地の拡大にともない、年々遺跡の見学や休養慰楽に訪れる人々の数も増大してきています。また遺跡の来訪目的も、見学から観光・休養・運動と大変多岐にわたっています。遺跡の保存を前提として、可能なかぎりこれらの要求にも対応していかなければならないでしょう。

遺跡の中央を流れる一乗谷川は、景観的にも遺構との関連においてもきわめて重要な位置をしめています。また遺跡内には多くの民家もあり、洪水などの災害からの防御も考慮しなければなりません。一乗谷川の整備は、遺構や景観の保全に留意した水辺空間の適切な活用と洪水対策の両面から計画立案、実施していく必要があるでしょう。

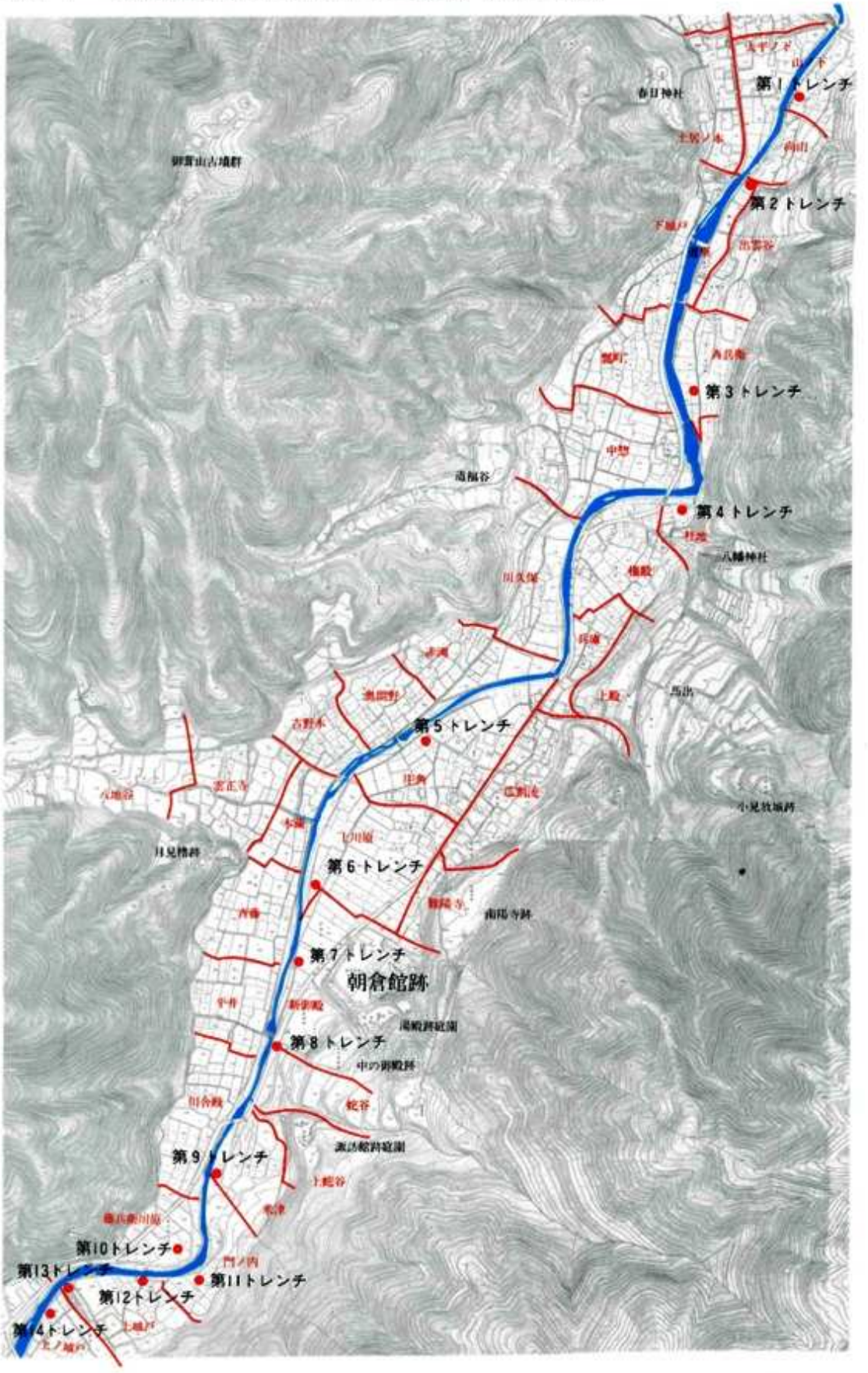
朝倉氏時代から今日まで、一乗谷川は洪水などで度々流路を変えているようです。具体的な整備計画を作成する上で、旧流路や流路に隣接した遺構の有無の確認は最も基本になるものであります。およその流路の幅は、把握できたのではないでしょうか。完全に川になっていたところには、当然のごとく遺構は存在しませんが、堆積土にはかなりの朝倉氏時代から近世にかけての遺物が混在しています。また工事が予想されるところに近接して、いくつかの遺構が検出されています。一乗谷川水辺空間整備工事設計にあたって、この報告書が有意義に活用されることを切に希望します。

発掘調査実施にあたっては、福井土木事務所をはじめとする関係各位、ならびに地元の皆様には多大なご理解とご協力をいただきました。心から厚くお礼申し上げます。

平成3年3月

朝倉氏遺跡資料館長　藤原武二

挿図－１　一乗谷朝倉氏遺跡の小字名とトレンチ配置図　（縮尺１／8000）



Ⅰ．遺跡の概要

一乗谷は、福井平野の東南部、越前中央山地を蛇行する足羽川が平野に流れ出ようとする直前に位置する。福井市の中心部からは、東南方向に約10kmの所である。

谷は、東を一乗城山・白椿山、南を殿上山・砥山・城山、西を八地山・御茸山で囲まれ南北に細長く、北でわずかに開くが、すぐ前面は足羽川で、天然の要害の様相を呈している。谷の中央には、周囲の山々の水を集めて北流する流程約9.3kmの一乗谷川が流れる。谷の北端と中央付近の、谷幅の最も狭まった所2ヵ所に、土塁と濠による上下の城戸を築いており、東西の山稜上に配された山城を含めて、この間約278haの広大な地域が、昭和46年に国の特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡に指定されている。

朝倉氏遺跡は、戦国大名朝倉氏が越前領国支配の拠点とした所で、一乗谷初代孝景がこの地に城下町を建設し始めたとされる文明3年（1471）以来、5代義景が織田信長によって滅ぼされる天正元年（1573）までの約100年にわたり、越前の首府として栄えた戦国城下町である。遺跡は、昭和42年以来継続的な発掘調査が実施され、史跡公園化を目指して順次整備されており、戦国城下町一乗谷の姿が甦りつつある。調査終了面積は、約8.3haである。

これまでの発掘調査によって、5代目当主義景の館跡を中心とする朝倉館地区では、濠と土塁に囲まれ、主殿・常御殿・茶室・庭園・厩等の建物群を配する朝倉館をはじめ、義景の母光徳院の屋敷とされる中の御殿、南陽寺、湯殿跡や諏訪館跡の庭園などを山裾の高台に置く、当主を取り巻くエリアの様子が明らかになってきている。一乗谷川を挟んで朝倉館地区の対岸、平井地係では、土塁で区画された有力家臣の屋敷群と町人の住む町屋が、矩折をもつ南北の幹線道路を軸に、整然と配置されていた。八地谷の北、赤渕・奥間野・吉野本地係では、寺院や武家屋敷とともに多数の町屋が、やはり南北幹線道路と東西道路を軸に、整然と並ぶ様子が明らかとなった。これらの調査結果から、街割は30m＝100尺を基準としたもので、道路に矩折・T字路・行き止まりなどをもたせるなど、計画的な街作りがなされたことを知ることができる。また出土した遺物から、当時の人々の生活や文化等を窺い知ることができる。

一乗谷川の流路のうち左岸は、県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査（第31・36・43次調査）により、部分的に把握できるが、右岸はほとんど調査されておらず、不明な点が多い。そのため、今回の発掘調査では、旧河道および川に面した地点での遺構の遺存範囲を確認することを目的に、川の右岸に13ヵ所、左岸に1ヵ所のトレンチを設定した。

表－1　第69次調査トレンチ一覧

No.	小字名	面積	遺構	備考	No.	小字名	面積	遺構	備考
1	安波賀町　山ノ下	27m²	無		8	城戸ノ内町　蛇谷	75m²	有	炉跡(カ)
2	城戸ノ内町　道東	90m²	有	城戸石垣	9	〃　米津	36m²	無	
3	〃　斉兵衛	30m²	無		10	〃藤兵衛川原	90m²	無	
4	〃　社地	46.5m²	無		11	〃　門ノ内	30m²	無	
5	〃　庄角	57m²	無		12	〃　上城戸	27m²	有	井戸
6	〃　上川原	60m²	有	溝検出	13	〃　上城戸	90m²	有	上城戸遺構
7	〃　新御殿	81m²	有	〃	14	東新町　上ノ城戸	35.75m²	有	遺構面

II. 調査に至る経過

この調査は、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡内を貫流する一乗谷川の、水辺空間整備事業の許可に先だって実施した事前の発掘調査である。経過は下記のとおりである。

昭和62年　一乗谷川河川環境整備計画が作成された

昭和63年　小規模河川改修事業として、新規採択

6．2　地元説明会

6.13　「ふるさとの川モデル河川」に指定される

7.11　一乗谷川改修促進期成同盟会設立総会

9.30　小規模河川改修全体認可

平成元年

2.21　第1回一乗谷川水辺空間整備計画検討委員会

7.13　第1回一乗谷川水辺空間整備計画幹事会

8.23　朝倉氏遺跡調査研究協議会に議題として提出

8.31　地元ヒアリング

9．7　第2回一乗谷川水辺空間整備計画検討委員会

平成2年

1.27　朝倉氏遺跡調査研究協議会専門委員会にはかる

3.23　文化庁と事前協議

旧河川敷の調査を早急に実施するようにとの指示

5.15　一乗谷川旧河川敷発掘調査のため、現状変更許可申請書を提出

6．1　トレンチ調査開始（～9.30）

8．3　特別史跡近接の2ヵ所について、発掘届を提出

9.17　発掘結果をふまえて事前協議書提出のための手直し案を検討

Ⅲ．発掘した遺構と遺物

第1トレンチ　（ＰＬ．１）

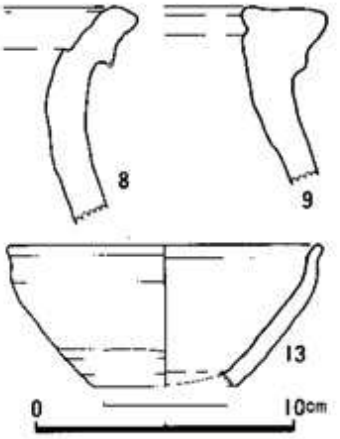
この地区は、特別史跡に隣接してはいるが、指定外のため発掘届を提出して調査を実施した。安波賀町11字山ノ下11、吉川実明氏の所有地で、現況は畑地である。９ｍ×３ｍのトレンチを設定し、調査を開始した。表土下は砂層で、その下約0.6mからは砂利層となる。ＰＬ．１の石列状のものは意味不明で、遺構は全く検出されなかった。その結果、この地が一乗谷川の旧河川であったものと判断できた。

遺物は、砂層中から遊離した状態で30片が出土した。内訳は、表－２に示したとおりである。越前焼Ⅳ群の擂鉢（１）をはじめ、鉄釉の碗（２）、灰釉の菊皿（３）、染付Ｂ群の皿（４）、同Ｃ群の皿（５・６）等、朝倉時代の遺物が主体であるが、土師器と思える破片（７）も見られ、攪乱の様相を呈している。

第2トレンチ　（ＰＬ．１）

この地区は、下城戸の東山裾に位置している。山裾には、下城戸の遺構とみられる直径1.5ｍ程度の巨石が１個据えられていた。それより2.5ｍほど西寄りの所で、トレンチ内に南々西方向に走る石列が検出された。面は西側でそろっており、旧河川の護岸と考えられる。トレンチ内を1.2ｍほど掘り下げてみたが、砂と砂利との互層で、旧河川と判断された。

遺物は、砂利層から出土した。344片を数える。越前焼の甕はⅡ群（８）～Ⅳ群（９）があり、擂鉢はⅣ群から近世のものがある。また、磁器類でも近世のものが約73％の割合で含まれている。これらの遺物のなかには、割れ口が摩耗して丸味をおびたもの（10～12）も多く含まれている。近世以降の瓦（18）も、これらの遺物に混在して出土した。遺物からも、同トレンチが旧河川に当たることが窺えた。



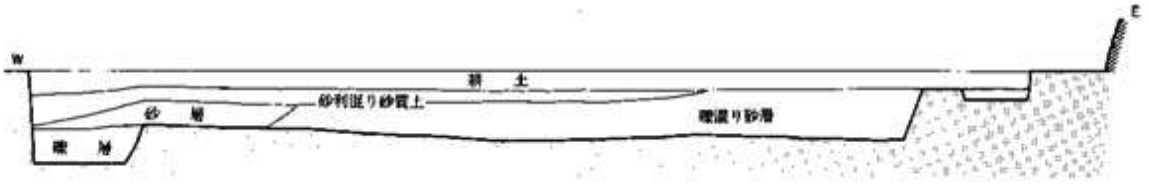
挿図－２　第２トレンチ出土遺物
８・９越前甕、13鉄釉碗

第3トレンチ　（ＰＬ．２）

この地区は、字斉兵衛の一乗谷川寄りの所で、対岸にドライブイン戦国の建物が位置している。褐色の表土の下は、薄く灰色の耕土がみられ、その下は砂利混りの砂質土層を挟んで砂層または礫層が互層になっている。さらにその下は礫層だけとなる。トレンチ中央部で巨石が所々にみられたが、全て意味がなく、河川の礫層に乗っている状態であった。

深さ約1.2mまで掘り下げた結果、旧河川と考えられた。

遺物は、砂利混り砂質土層上面から出土した。出土量は少なく、9片であった。越前焼鉢は、擂鉢形のもの（19）と、口縁の内湾するもの（20）、擂鉢はⅣ群のもの（21）がある。同トレンチでも近世の陶磁器類が混在していた。

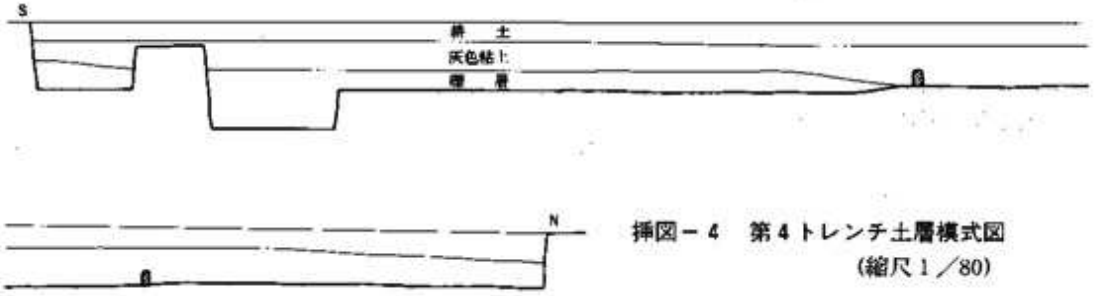


挿図－3　第3トレンチ土層模式図　（縮尺1／80）

第4トレンチ　（PL．2）

この地区は、一乗谷川が小淵上の山裾に大きく湾曲している所にある。耕土をとると、山の畦石が斜めに走り、その下に褐色または灰色の粘質土がみられた。水が多く湧き、ポンプでの排水に時間がかかった。灰色の粘質土の下は、褐色の礫層が続いており、深さ約1.2mまで掘り下げ、河川敷であることを確認した。

遺物は、粘質土から出土した。34片を数える。ヘラ記号をもつ越前焼の甕（22）や、Ⅳ群の擂鉢（23・24）、B群白磁皿（25）等が出土したが、磁器類の大部分は（26・27）をはじめとする近世以降のものであった。

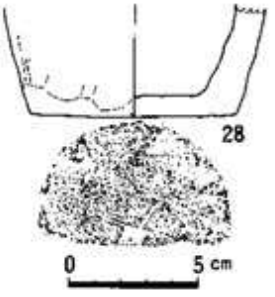


挿図－4　第4トレンチ土層模式図
（縮尺1／80）

第5トレンチ　（PL．2）

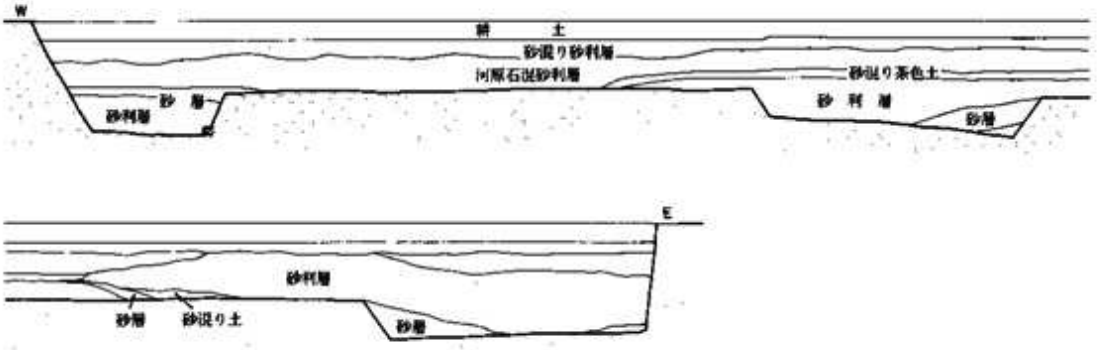
この地区は、一乗谷川をはさんで奥間野地籍の対岸にあり、川に直行してトレンチを設定した。表土、床土、床土下の砂利層の順で掘り下げた。その下は、河原石を含む砂利層となり、深さ約1.2mまでそのような状態であった。一乗谷川の河川敷または川辺の範囲に相当するものと考えられた。

遺物は、床土下の砂利層と、その下層である深掘り部分の砂利



挿図－5　第5トレンチ
出土遺物　28越前壺

層より出土した。163片を数える。上、下層とも近世の陶磁器を多数含んでおり、出土遺物全体に占める割合は約62%である。朝倉時代の遺物は、越前焼等があるが、全体のわかる破片は少ない。図示した越前焼小壺（28）は、外面底部にヘラ記号を刻む例である。近世の磁器（29～31）は、（28）とともに下層から出土した。



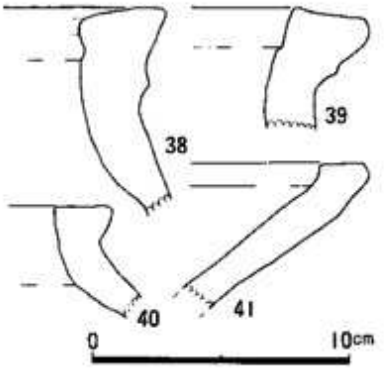
挿図－6　第5トレンチ土層模式図　（縮尺1／80）

第6トレンチ　（PL．3）

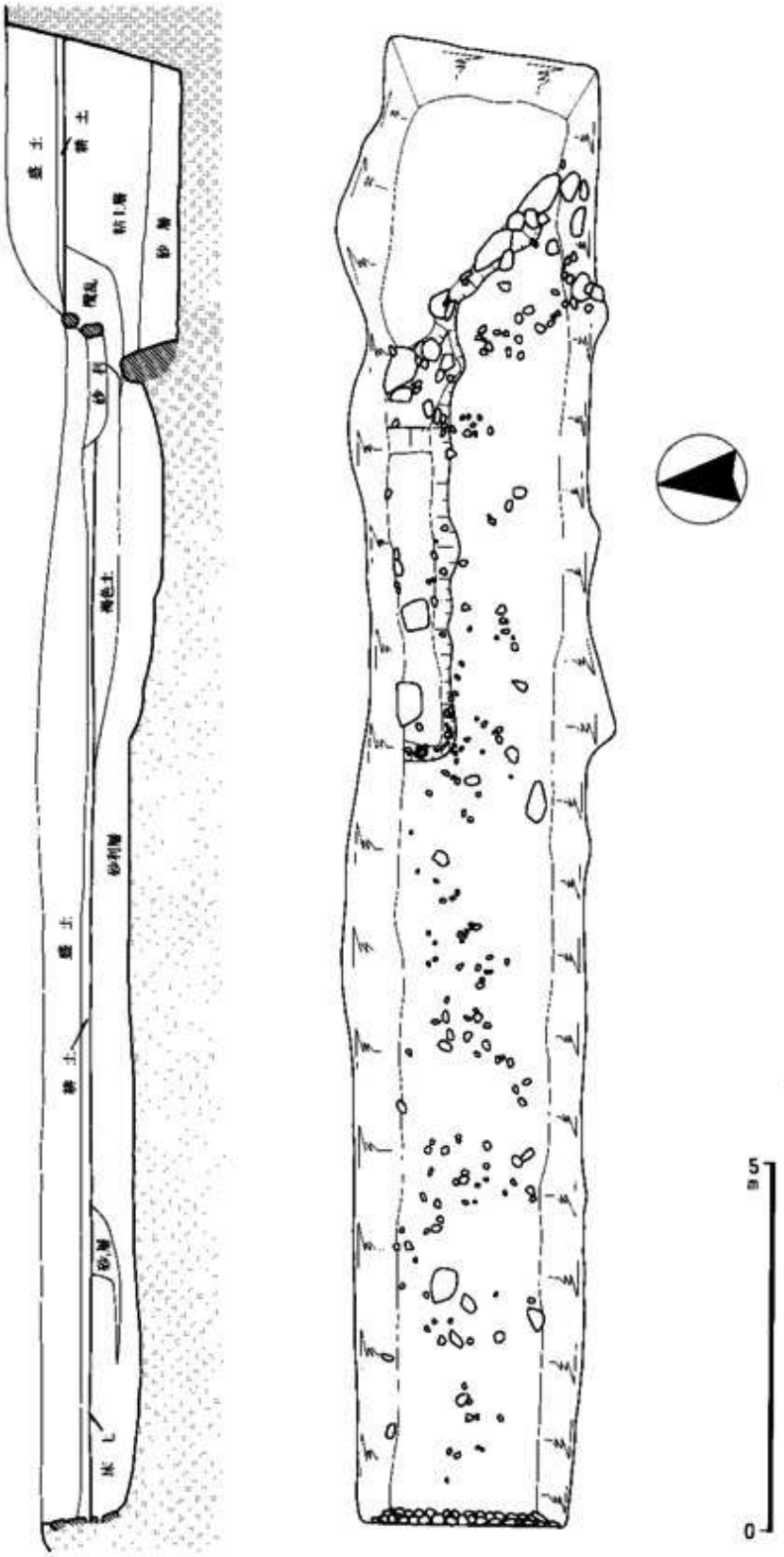
朝倉館の北西方向、一乗谷川に直交してトレンチを設定した。この地区は、朝倉館が単郭式であるのか、複郭形式であるかを知る上で興味あるところであり、土塁と考えられる細長い田が巡る付近を選んで調査を実施した。川側は、現在の河川の石垣が検出され、細かい砂利層と砂層とが互層となっていた。遺物は若干混入していたが、河川敷と考えられた。朝倉館側では、耕土、床土が2面ほどみられた。その下は、粘質スクモ層が厚くみられ、トレンチを斜めに走る巨石の溝が検出された。溝は、擂鉢状になっており、方向は唐門と北西土塁隅とのちょうど中間に向かっている。溝の幅は、トレンチ調査のため不明であるが、2.5m以上あるものと思われ、朝倉館外濠の排水溝ととらえることができる。

遺物は、トレンチ川側の表土及び河砂利層、朝倉館側の溝、深掘り部分の砂利層から出土した。183片を数える。表土及び河砂利層から出土した遺物群は、朝倉時代のものが主体であるが、近世以降の陶磁器も約11%混じっていた。

溝内から出土した遺物群は、上層の埋土（粘土層）と下層の砂層から出土したものがあり、近世以降の陶磁器も若干含まれている。越前焼ではⅣ群の甕（38）や擂鉢がある。深掘りの砂利層からは、越前焼のⅣ群の甕(39)や、断面が逆三角形の短い口縁をもつ中甕（40）、擂鉢形を呈する鉢（41）など、朝倉時代の遺物のみ出土している。



挿図－7　第6トレンチ出土遺物
38～40越前甕、41同鉢

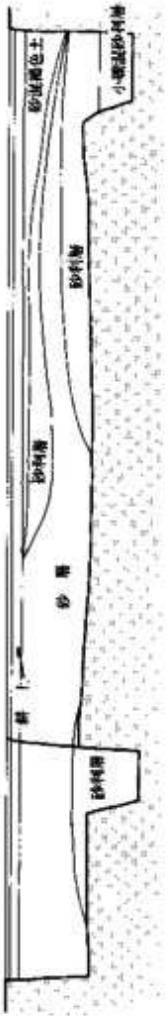


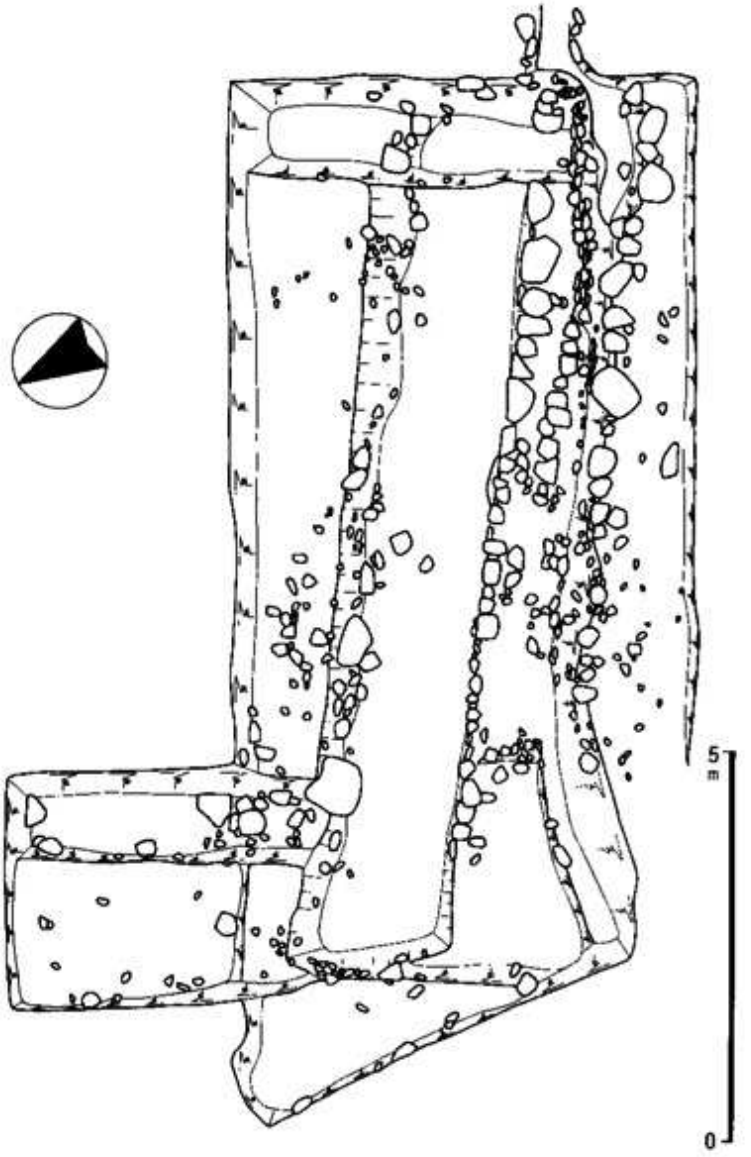
挿図－8　第6トレンチ土層模式図・遺構平面図

第7トレンチ　（PL．4・5）

朝倉館の西方、一乗谷川近くにトレンチを設定した。この地区は、朝倉館外濠整備の際、幅約3ｍの素掘りの溝らしきものが見つかっており、その続きを追うことを目的に実施した。芝生の下は、耕土（20cm）、床土（5cm）、砂利層（10cm）、砂土層（60cm）、砂利層というように、1ｍ近く砂と砂利層が互層をなしており、後世の遺物も多く混入していた。トレンチ南辺では、2重に石垣が検出された。内側の石垣は、溝になっており、灰色

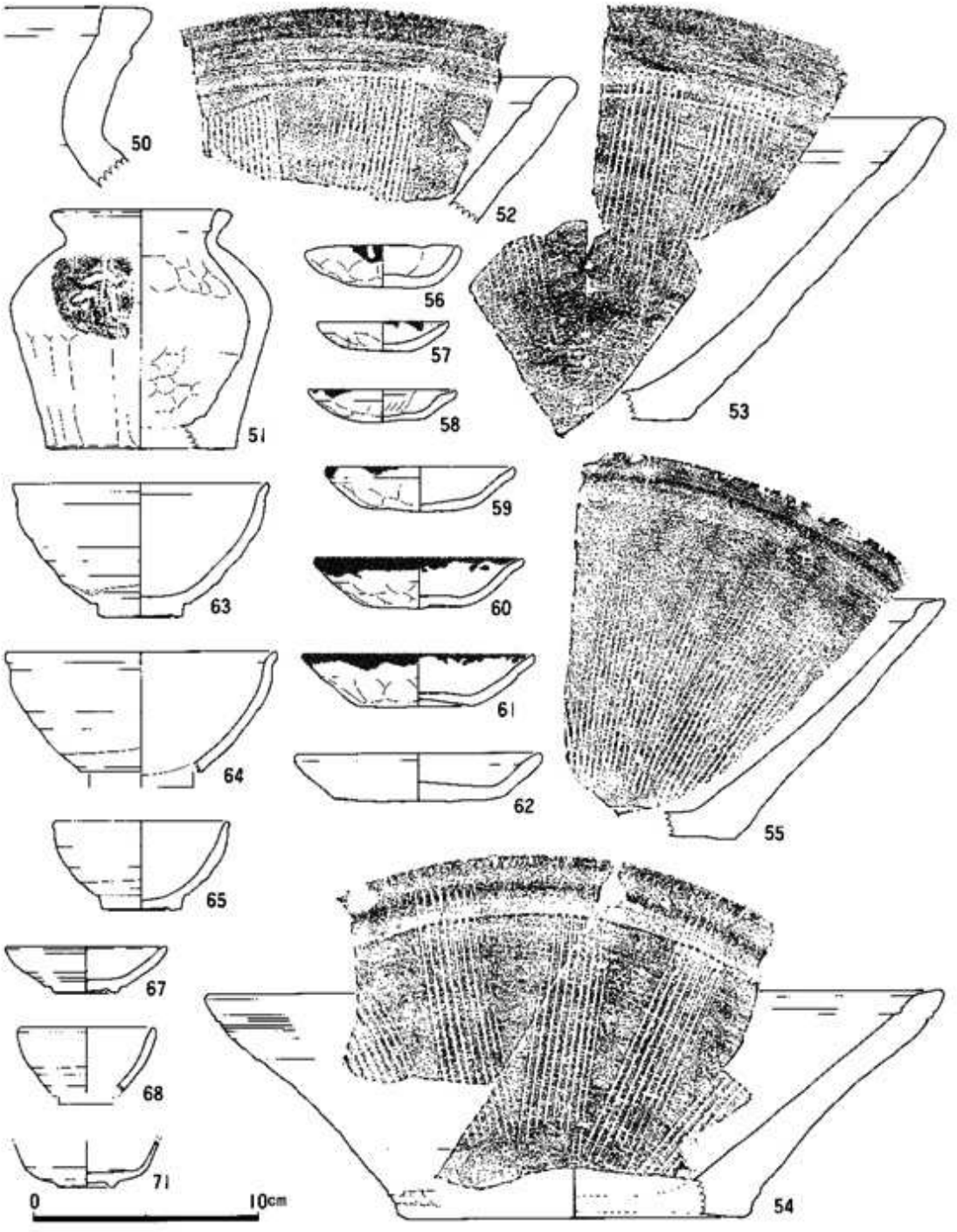
挿図－9
第7トレンチ土層模式図・遺構平面図





砂土が幅約0.7ｍで堆積していた。溝の対岸は、石がなく素掘りであった。この溝も、第6トレンチで検出した溝とともに、朝倉館外濠と一乗谷川を結ぶものと考えられる。

遺物は、2101片を数える。このうち566片は、近世陶磁器で、砂と砂利の互層とその上層から出土している。ここでは、これより下層の砂利層、小礫混り砂利層等、溝の覆土から出土した遺物群について記す。



挿図－10　第７トレンチ出土遺物　50越前甕、51同壺、52～55同擂鉢、56～62土師質皿、63～65鉄釉碗、67灰釉皿、68同坏、71白磁坏

越前焼　甕（50）は、口縁が外傾して立ち上がり、口縁端部は水平に切られる中甕である。（51）は小壺である。内面に鉄錆が付着しており、「お歯黒壺」と思える。外傾する頸部内面に、沈線が巡る。肩部外面には篦記号を刻む。（52・53）は、口縁断面が丸く、口縁からややドがった部位に沈線を引くⅢ群aの擂鉢である。（54・55）は、口縁が内傾して切られ、口縁に近い部位に沈線を引くⅣ群である。

土師質土器　皿は、手づくねで皿形に成形しただけのB類（56）、成形後見込中央から口縁外側にかけてナデ調整するC類のうち、口径6cm内外のC_1類（57・58）、同9cm内外のC_2類（59）、見込脇を強くナデ、底部を平坦につくるD類（60・61）等がある。（62）は、約0.9cmを測る厚手の底部からほぼ直線的に体部の立ち上がる皿である。これまでの出土例は少なく、朝倉時代以降の遺物と考えられる。

瀬戸・美濃焼　鉄釉の碗は、口径が12cm内外で口縁の屈曲をもつ（63・64）、8cm内外で口縁の屈曲が弱い（65）等がある。高台の残る（63・65）は、いずれも輪高台であるが、（65）には、畳付に回転糸切り痕が見られる。

灰釉は、青磁碗を模して線描蓮弁文を型押しした碗（66）のほか、腰部を篦で削って高台を作り出し、輪高台とする小皿（67）や、口径約6cmの坏（68）等が出土した。

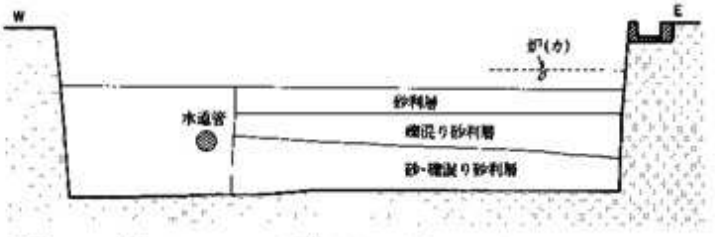
中国製陶磁器　線描蓮弁文の青磁碗（69）、口縁が端反りの白磁皿C群（70）、腰部が大きく張り、重ね焼きのため見込の釉を輪状に拭き取る白磁坏（71）のほか、染付の碗・皿類（72・73）が出土した。

金属製品　銅銭が6枚出土した。太平通宝（74）、景徳元宝（75）、元豊通宝（76）、天禧通宝・大観通宝（77）、永楽通宝（78）である。

第8トレンチ　（PL．6）

この地区は、蛇谷からの道を降りてきた所で、旧県道跡地である。路床、砂利面は固いためユンボによって排土した。0.5mの厚さに堆積した何面かの道路面を除去すると暗褐色土がみられ、そこから0.6m×0.55mの石組みの炉跡と思われる遺構が検出された。銅銭と焼土が発見されたが、他には全く遺構はみられなかった。トレンチの南と西側で、さらに1mまで掘り下げたが、礫混りの砂利層のみで、河川敷と考えられた。

遺物は道路砂利面下の暗褐色土層とその下の砂利層から出土した。87片を数える。い



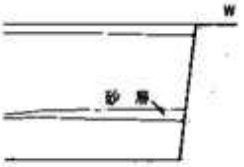
挿図－11　第8トレンチ土層模式図　（縮尺1／80）

ずれの層からも、近世以降の陶磁器類が混在して出土した。トレンチ西辺の深掘り部分より、組合わせ五輪塔の空・風輪（79）が出土した。

第9トレンチ　（PL．6）

この地区は、河川の氾濫が予想される所である。上層0.5mの所では炭層なども認められたが、その下の砂利層からは、新しい時期の遺物も多く含まれていることから、新しい時期に河川になったものと考えられた。深さは1.4mまで掘り下げた。

遺物は耕土下の砂利混り褐色土と、深掘りによる下層（砂利層等）から出土した。522片を数える。上層は、越前焼の甕・壺・鉢（80）・擂鉢（81）・土師質皿（82）や、青磁碗（83～85）をはじめとする中国陶磁器、硯（86）等朝倉時代の遺物とともに、近世陶磁器が出土した。下層も、瓦（88）や（87）など近世以降の陶磁器が38%混在していた。

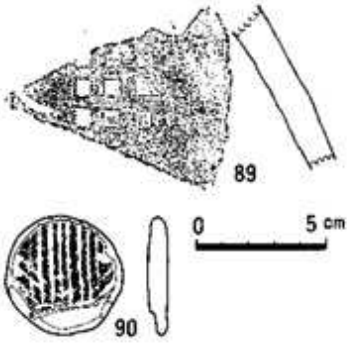


挿図－12　第9トレンチ土層模式図　（縮尺1／80）

第10トレンチ　（PL．6）

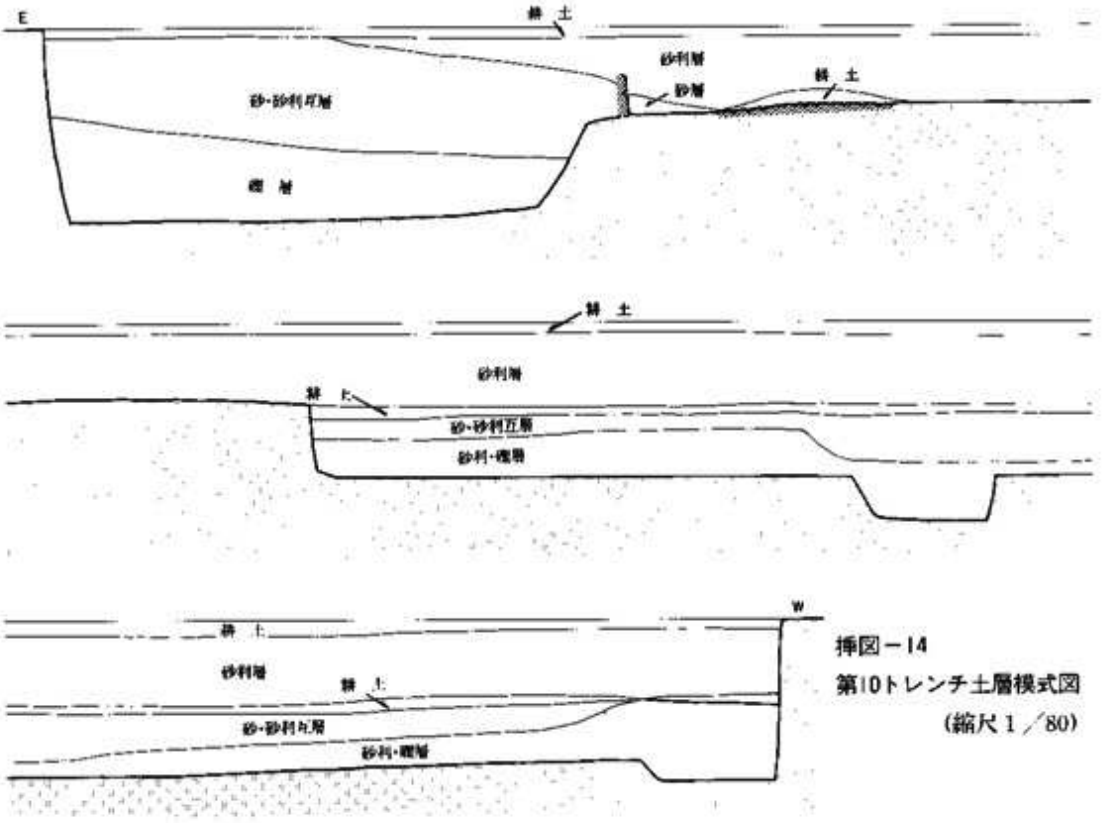
字藤兵衛川原のこの地は、約5,000㎡の広さがあり、遺構が残っていれば、かなりの規模のものであることが予想された。発掘の結果、地表からすぐ砂層となり、0.8～0.9mまで人頭大の河原石と砂層とが互層となっていた。深さ0.9mからは、旧耕土とみられる黄褐色土と田の段の石列が検出された。その下は、1.5mまで掘り下げたが、全く砂利、礫、砂層であった。結局藤兵衛川原は、一乗谷川の幾度となく繰り返された氾濫で、遺構が完全に消失しているものと思われる。

遺物は326片を数える。このうち236片は、旧耕土より上層の整地土（砂利層）から出土し、その約61%は、近世以降の陶磁器類であった。また旧耕土上面から、寛永通宝3枚が錆着いて出土した。越前焼には割れ口が摩耗して、丸



挿図－13　第10トレンチ出土遺物　89越前甕、90同擂鉢

味をおびたものも見られるが、(90) は擂鉢片を意図的に円板状に加工したものである。下層から出土した遺物も、約半数は (91～96) 等近世以降の陶磁器であり、攪乱の様相を呈している。

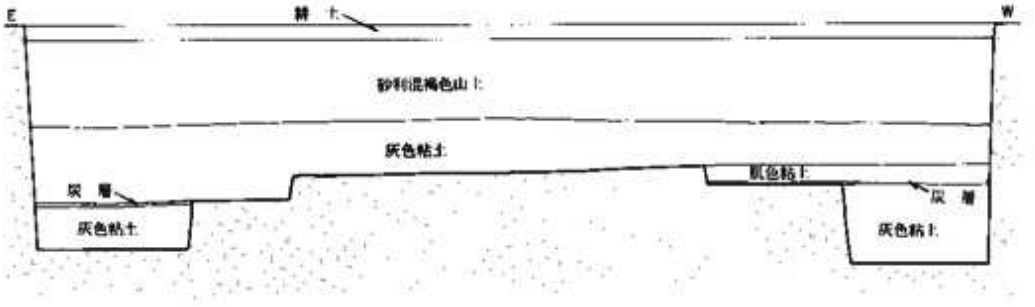


挿図－14
第10トレンチ土層模式図
(縮尺１／80)

第11トレンチ　（ＰＬ．７）

この地区も、深さ2.47ｍまで掘り下げたが、耕土、床土、砂利混り山土整地層、灰色粘土、礫混り地山層と続いている。遺構は全く検出されなかった。

遺物は灰色粘土層から出土した。10片を数える。越前焼のⅣ群の擂鉢（99･100）や、土師質皿Ｃ類（101）、同Ｄ類（102・103）が見られた。



挿図－15　第11トレンチ土層模式図　(縮尺１／80)

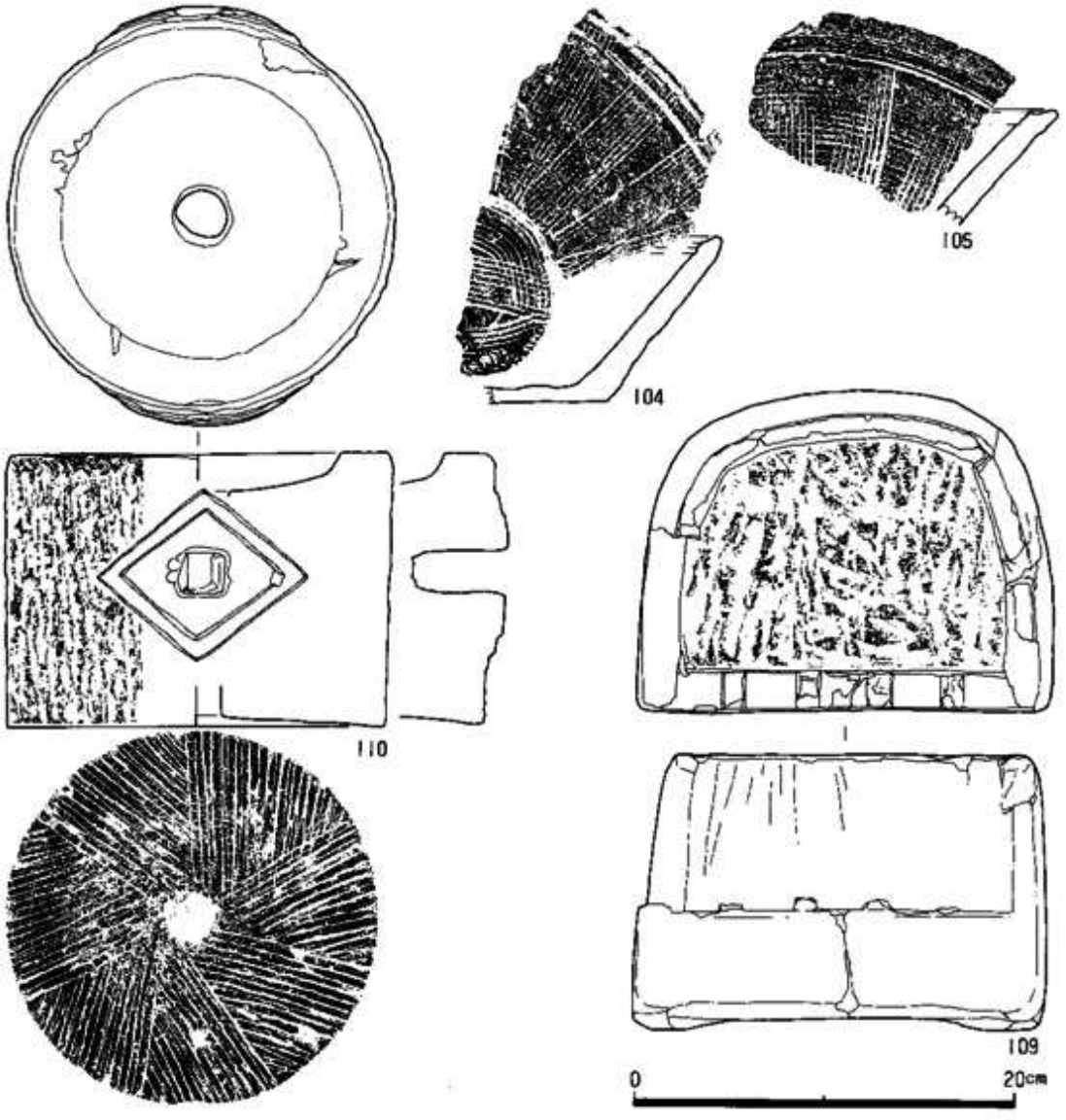
第12トレンチ　（ＰＬ．７）

この地区には、Ｌ字形にトレンチを設定した。耕土、床土を除いた段階で石組井戸が検出され、河川ぎりぎりの所まで遺構のあることが判明した。井戸は、直径約0.6ｍ、深さ2.55ｍで、底に木枠はない。中に人頭大の河原石と褐色粘土がつまっていた。

遺物は、72片が出土した。床土面からも出土したが、ここでは主に石組井戸から出土した石製品等一括資料について記す。

越前焼　（104・105）は口縁を内傾して切るⅣ群の擂鉢である。（104）は、焼成以前、擂目を引いた後内面をナデたため擂目が潰れるなど、粗略な作りである。

中国製陶磁器　染付皿が、２点出土した。（106）は、底部がいわゆる碁笥底の皿Ｃ群であ

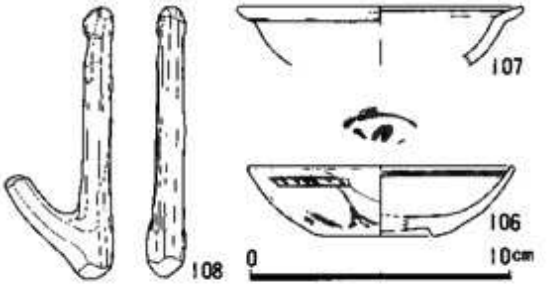


挿図－16　第12トレンチ出土遺物(1)　104・105越前擂鉢、109バンドコ、110茶臼

る。外面口縁下に波濤文帯、同胴部に芭蕉葉文を配する。(107) は、口縁が外反する皿である。

木製品　(108) は、小形の自在鉤である。

石製品　(109) は、平面がD字形を呈するバンドコの身である。前面に5窓を開け、底部の左右に脚を削り出す。内面底部には、ノミによる粗い加工痕が残る。(110) は、笏谷石の茶臼の上臼である。目は7分画で、1分画毎の溝は細かく、幅、本数等不規則に刻まれる。側面は、縦方向にノミ痕を残し、意匠化している。



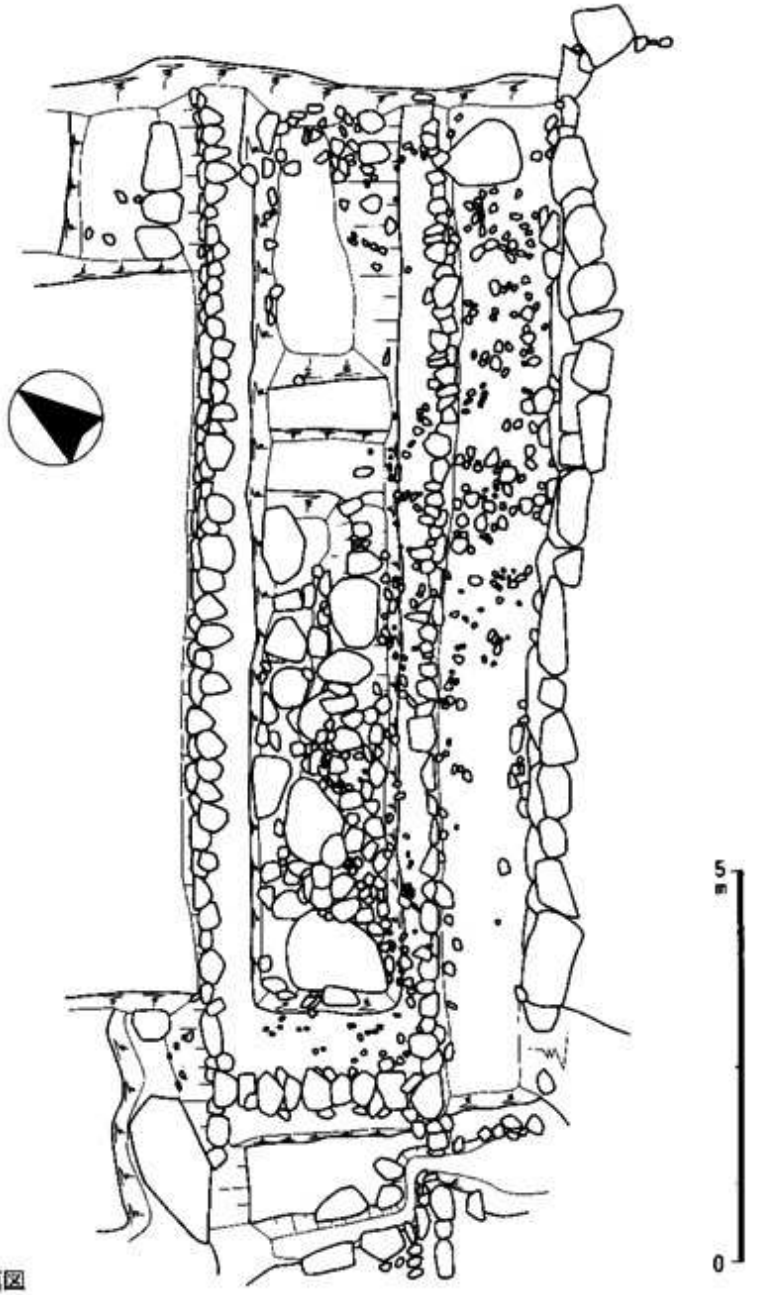
挿図－17　第12トレンチ出土遺物(2)　106・107染付皿、108自在鉤

第13トレンチ

(PL. 8・9)

この地は、上城戸の石垣付近で、川との間に幅5mほどの平坦地がある。事前に、一乗谷川の護岸を福井土木事務所の方で除去し、発掘終了後復旧した。

発掘は、城戸石垣の根を出すことから開始した。根は浅く、平坦地は幅3mの道路が走



挿図－18　第13トレンチ遺構平面図

っていた。この道路は、砂利面が4面あったが、さらに深く掘った所から、新しい遺物が出土したため、4面とも朝倉時代の遺構でないことが判明した。道路のすぐ西側で、旧護岸と思われる巨石が、川底にかけて貼りついた状態でいくつか検出された。結局、土塁の根石が旧地山で、それより2mぐらいの幅が犬走り状に残り、そこから川となっていたものと思われる。

遺物は、113片が出土した。この内71片は上層から出土しており、その内訳をみると、約66%が近世以降の陶磁器類であった。下層からは、越前焼擂鉢（111・112）等39片が出土したが、約46%は、（113～119）など近世以降の陶磁器類であった。また、河川の護岸石積に貼り付いて、明治・大正期の「一銭」、「二銭」銅貨が出土した。

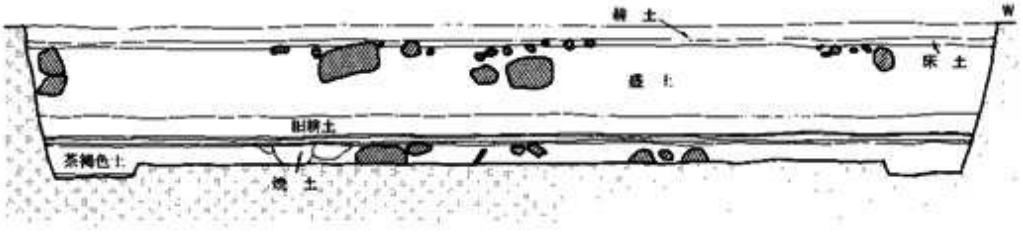
第14トレンチ　（PL．9・10）

この地区は、すでに土地改良されていて、特別史跡の指定地外である。所有者は、浄教寺町10－34、三ツ屋博一氏で、発掘届を提出して調査を開始した。土地改良以前の地図では、現地表より一段低くなっている。調査の結果、表土から約1m下に旧耕土、床土がみられ、その下に炭混り土の遺構面が検出された。遺構面では、焼土ピットもみられた。

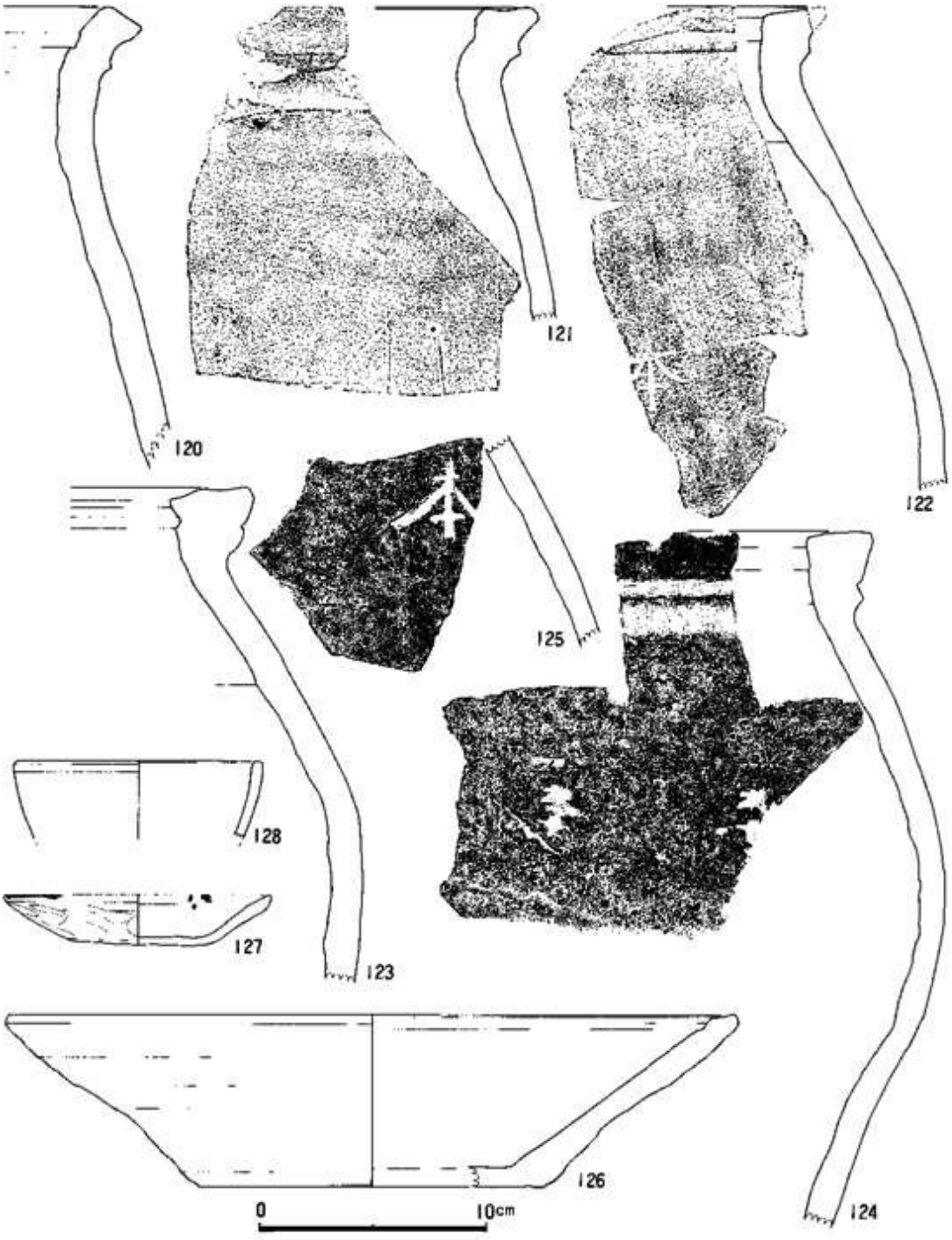
遺物は、549片が出土した。近世以降の遺物も30片あったが、ほとんどが床土より上で出土している。朝倉時代の遺物の内、226片は越前焼で、甕が最も多い。（120）は、口縁が外傾して切られ、頸部外側に稜、内側に浅い凹線を配する甕Ⅲ群bである。（121・122）は、口縁が肥厚したⅣ群aで、箆記号や凹字の「本」と格子目のスタンプがみられる。（123・124）は、更に口縁の肥厚したⅣ群cである。（126）は、口縁を内傾して切り、内面口縁下に凹線を配する、いわゆる擂鉢形の鉢である。

（127）は、広く平坦な見込みをもつD類の土師質皿である。灯明皿として用いており、見込や口縁にタール状の付着物がみられる。

中国製陶磁器は、張りのある腰部から口縁が立ち上がり、外面が無文の青磁碗（128）や、外面に鎬蓮弁文を配する同碗（129）、見込みに玉取り獅子、外面胴部に唐草文を描くB1群の染付皿（130）等が出土した。



挿図－19　第14トレンチ土層模式図　（縮尺1／80）



挿図－20　第14トレンチ出土遺物　120～125越前甕、126同鉢、127土師質皿、128青磁碗

表－2　第69次調査トレンチ別出土遺物一覧

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	合計
越前甕	2	68	4	10	16	34	64	13	27	51		2	10	181	482
〃　壺		6			12	9	29	1	3	10	2	2	5	22	101
〃　鉢	1	3	2		2	1	7		3			1	1	5	26
〃　擂鉢	6	27	1	9	7	9	56	2	7	14	3	4	10	16	171
〃　その他						1								2	3
土師質皿	6	60		2	11	81	1743	30	414	33	5	38	11	228	2662
〃　土釜							5			2					7
〃　土鈴							2								2
〃　小壺							3								3
鉄釉碗	3	1			2	2	20	1	1	1				4	35
〃　皿							1								1
〃　その他		2					1							5	8
灰釉碗							22		1					1	24
〃　皿	1	2			1	2	19								25
〃　鉢						1		5							6
〃　坏							1								1
瀬戸壺				1											1
瓦質香炉							1								1
〃　その他							4	3	2						9
青磁碗		5				1	9	4	11	1		1	1	11	44
〃　皿	3	4				2	2	1	1	4		1		5	23
〃　鉢							2							1	3
〃　盤						1	2							1	4
〃　その他		1												1	2
白磁皿	2	12		1	3	6	18		1	3			1	14	61
〃　坏		2				1	4			1				3	11
〃　その他									1						1
染付碗		3			1	2	12			3		1			22
〃　皿	3	17			2	1	5	1	1	5		5	2	7	49
朝鮮壺					1		2								3
〃　そば茶碗		1													1
近世陶磁器		120	2	10	99	24	32	21	42	189		2	65	30	636
土師器	3						3		2						8
須恵器		1					3	1							5
金属銭		1			1	1	7			4			1	1	16
〃　近世		1											3		4
〃　その他		1			2		1	1	1	1			1	4	12
石バンドコ		1					6		3	2		2		5	19
〃　盤						1						1			2
〃　砥石							1								1
〃　硯									1	1					2
〃　茶臼												2	1		3
〃　臼												2			2
〃　その他		5			1	2	6	1		1		5			21
木自在鉤												1			1
〃　皿														1	1
〃　加工木							1							1	2
〃　その他				1		1	3	1				1			7
その他壁土												1			1
〃　貝片								1							1
〃　骨片													1		1
〃　その他					2		4								6
合　計	30	344	9	34	163	183	2101	87	522	326	10	72	113	549	4543

Ⅳ. ま と め

一乗谷川の旧河川敷を確認するため、14ヵ所にトレンチを設定し、発掘を実施した。

第2トレンチ（挿図－21）は、現在草地となっているが、明治9年の地籍図では河川であることが読みとれる。昭和35年に河川改修工事が行われた際、現在の堰付近、地下1.5mの所で80kgあまりの銅銭が出土したという報告もある。河川改修によって河川変更のあったことが、調査でも裏づけられた。

第5トレンチは、発掘の結果旧河川であることが判明した。対岸の奥間野地籍の調査で、南北方向の道路遺構が現在の一乗谷川によって抉りとられていた事実とよく符号する。

第6・7トレンチでは、朝倉館外濠に接続する大溝が検出され、遺構上面には度重なる氾濫を示す砂層が互層となって堆積している状況が確認された。

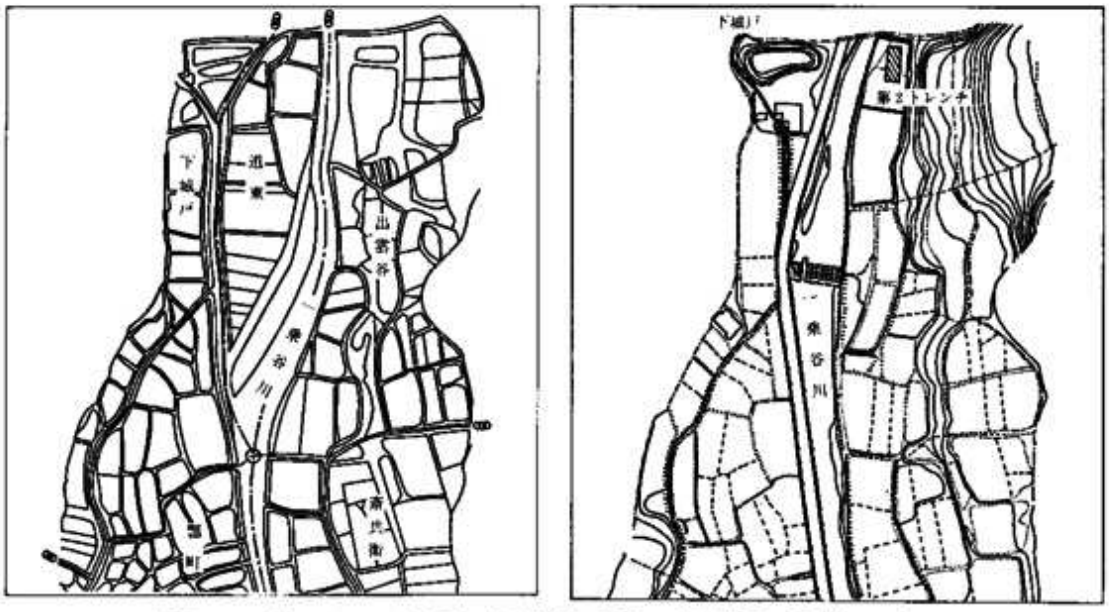
第10トレンチでは、藤兵衛川原地籍全体が川の氾濫を受けていることが明らかとなった。

第12トレンチでは、井戸が発見されたため、遺構はよく残っているものと見られる。

第13トレンチでは、上城戸土塁石垣と一乗谷川との間で、幅約2mの犬走り状の平坦地が検出できた。しかし、城戸口になるかどうかは判断できなかった。

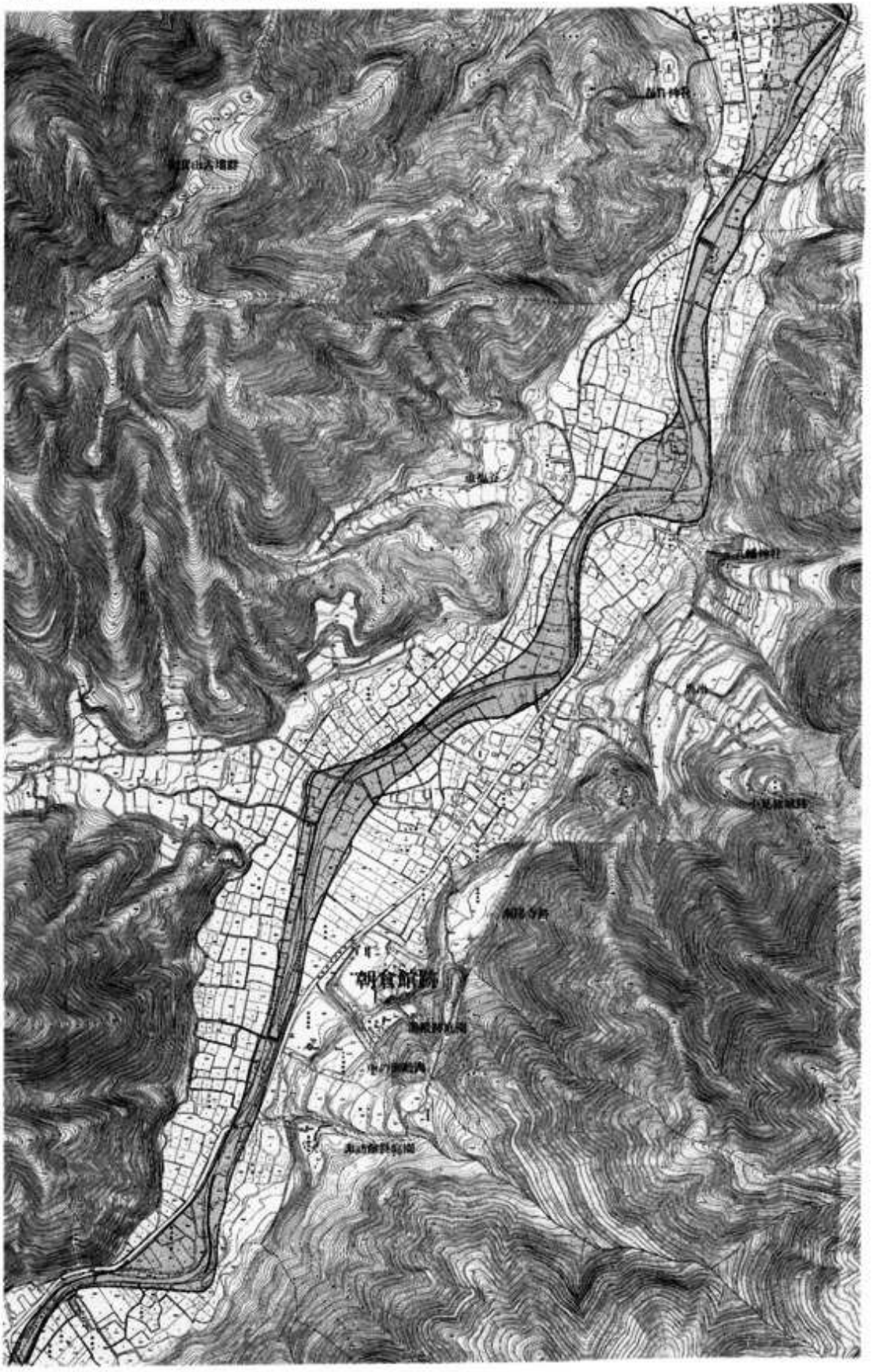
以上、400年前の一乗谷川の旧河川遺構は発見できなかったが、発掘結果からは現在に至るまでの河川流路の移動、度重なる氾濫、河川敷などの様子が理解できたと言えよう。

挿図－22は、調査結果に基づいて作成した一乗谷川の最大流路幅であり、この所見が「一乗谷川水辺空間整備事業」実施にあたってよく検討され、よりよい史跡公園が完成することを願うものである。

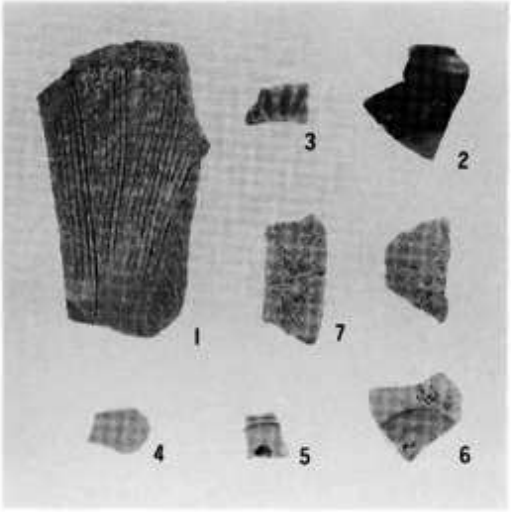


挿図－21　第2トレンチ付近の流路変更（明治9年地籍図・現在）1／2000

挿図－22　一乗谷川の推定最大流路幅



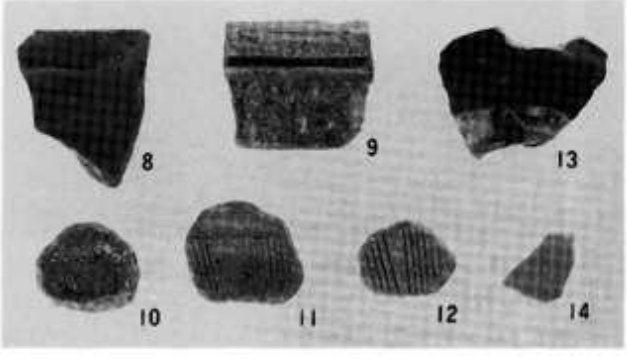
第1トレンチ全景（東から）

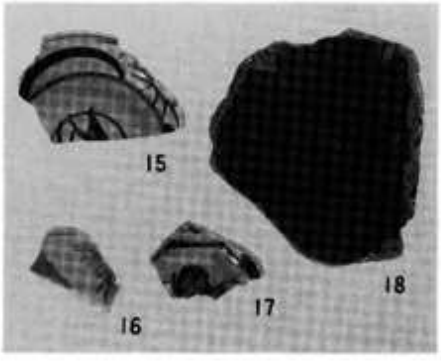


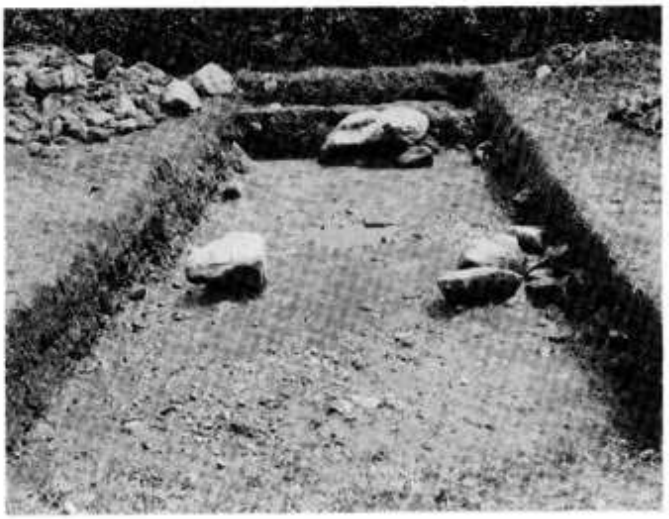
第1トレンチ出土遺物
1 越前焼擂鉢、2 鉄釉碗、3 灰釉皿、
4～6 染付皿、7 土師器

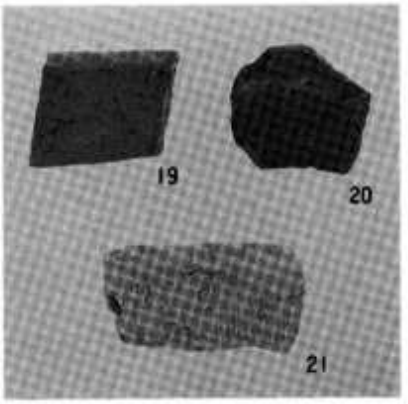
第2トレンチ全景(南から)

第2トレンチ出土遺物
8～10 越前甕、11・12 同擂鉢、
13 鉄釉碗、14 青磁碗、
15～17 近世、18 瓦



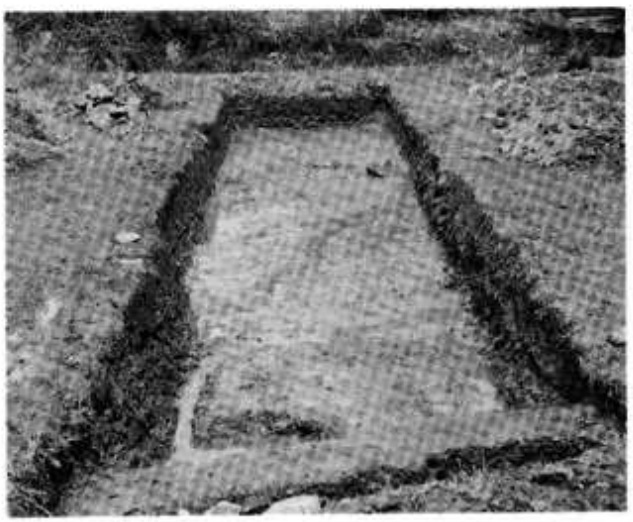


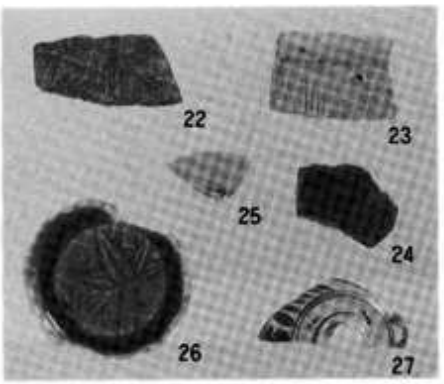




第3トレンチ出土遺物
19・20 越前鉢、21 同擂鉢

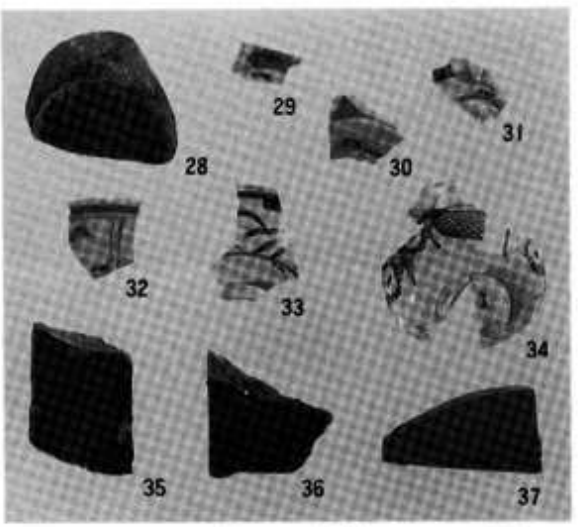
第3トレンチ全景（東から）





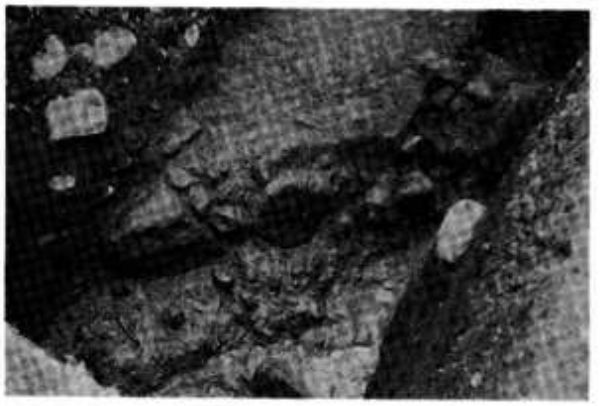
第4トレンチ出土遺物 22 越前甕
23・24 同擂鉢、25 白磁皿、26・27 近世

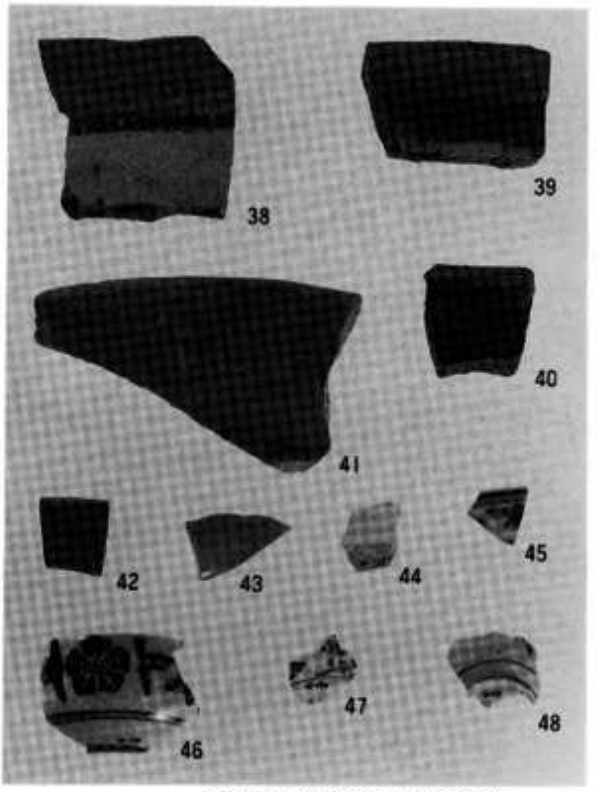
第4トレンチ全景（南から）



第5トレンチ出土遺物 28 越前壺、29～34 近世、35～37 瓦

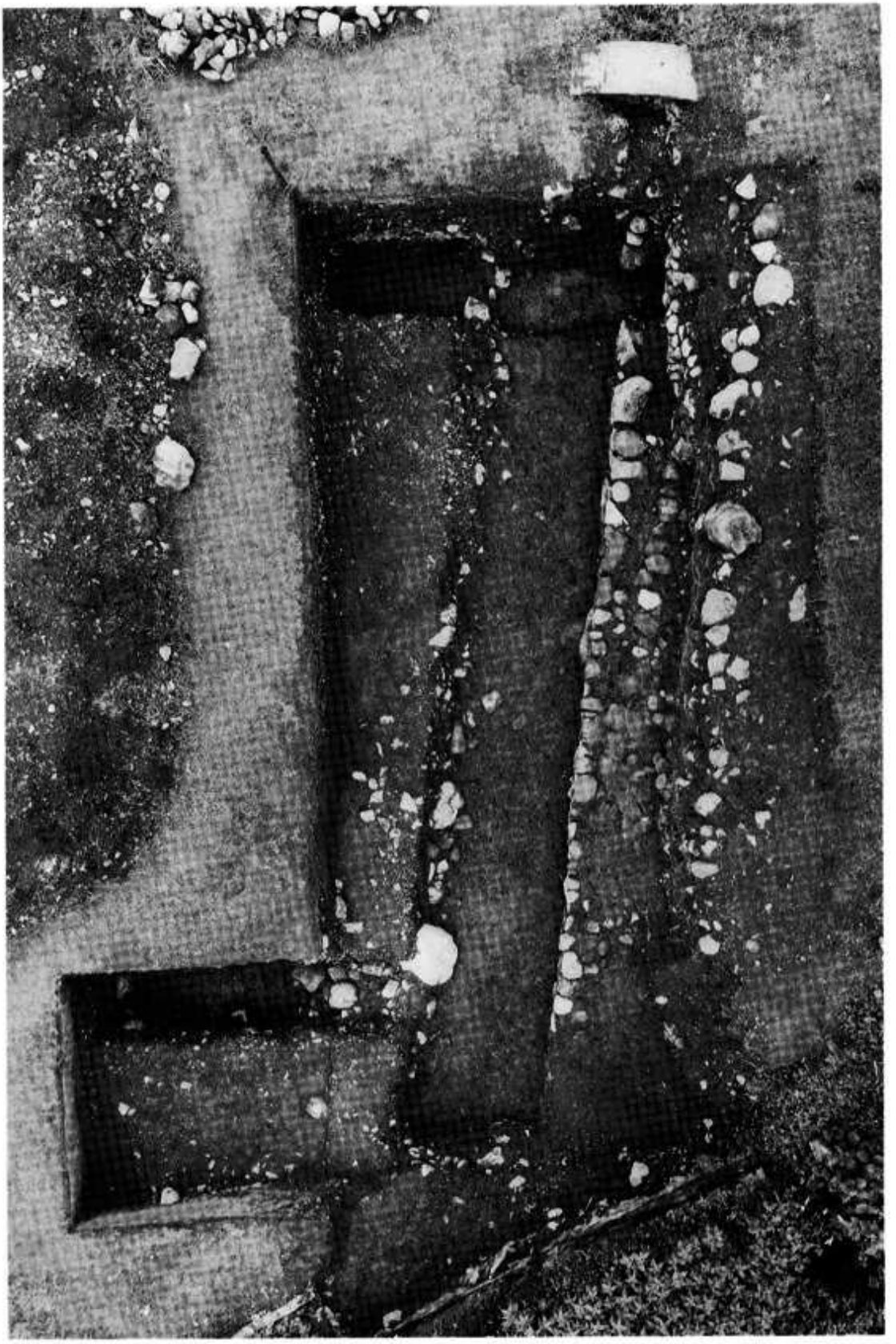
第5トレンチ全景（東から）



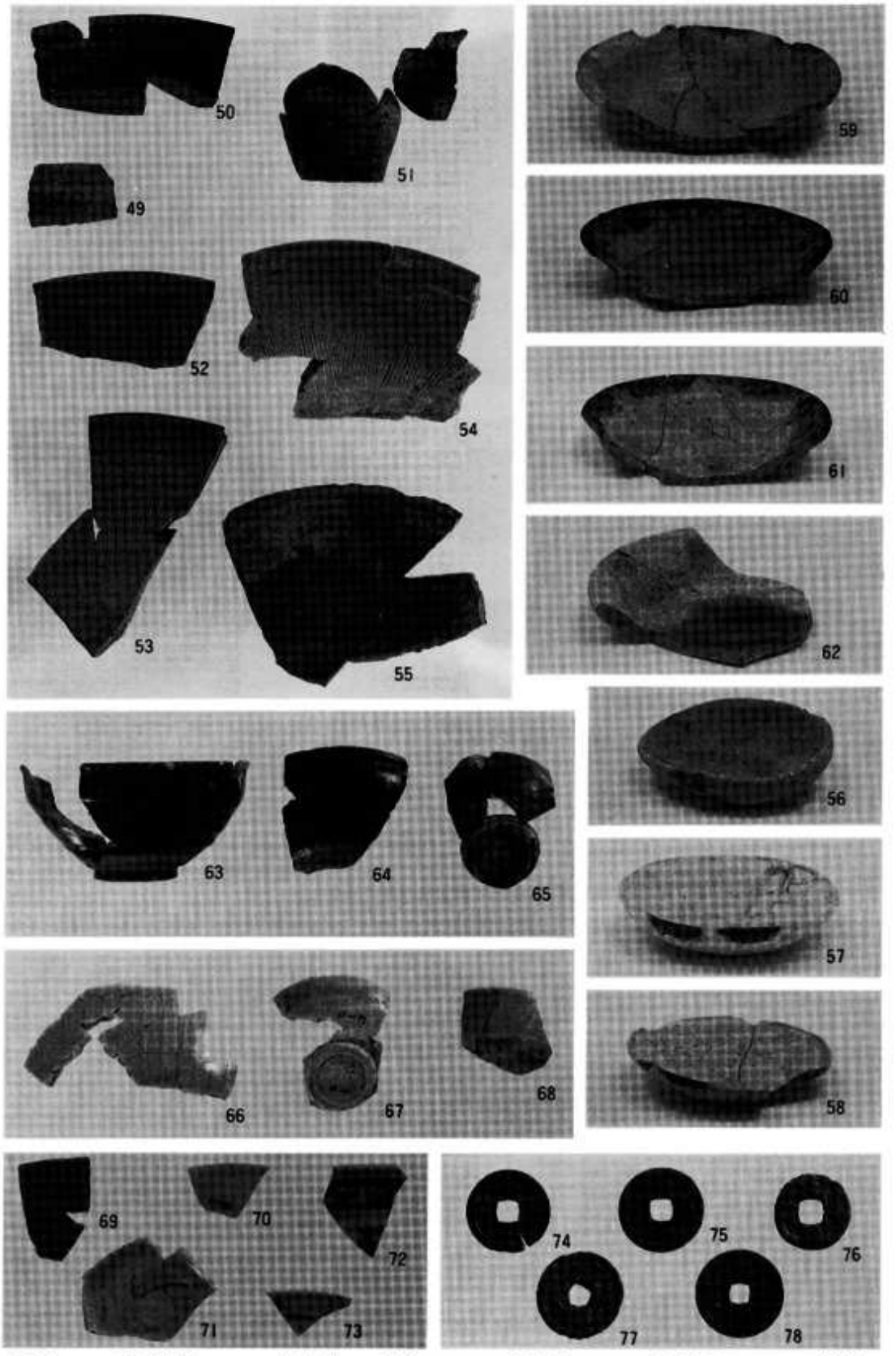


第6トレンチ全景

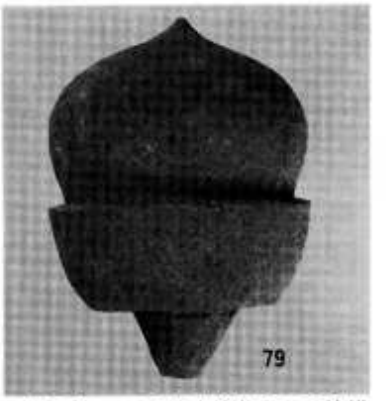
第6トレンチ全景（東から）
同　溝
同、出土遺物　38～40 越前甕、41 同鉢、42 青磁碗、43 同皿
44 白磁坏、45 染付碗、46～48 近世



第7トレンチ全景

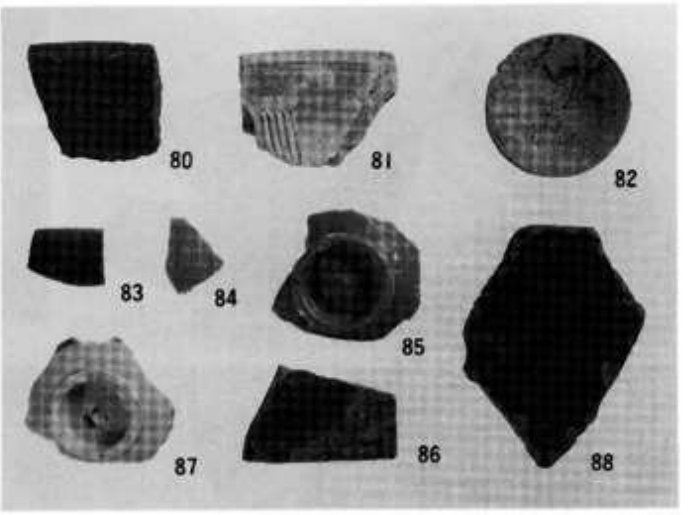


第7トレンチ出土遺物 49・50 越前甕、51 同壺、52～55 同擂鉢、56～62 土師質皿、63～65 鉄釉碗、66 灰釉碗、67 同皿、68 同坏、69 青磁碗、70 白磁皿、71 同坏、72 染付碗、73 同皿、74～78 銅銭



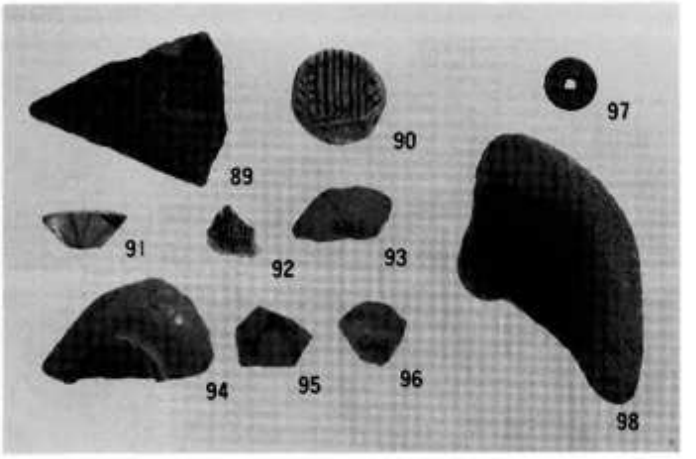
第8トレンチ出土遺物 79 五輪塔

第8トレンチ全景（南から）



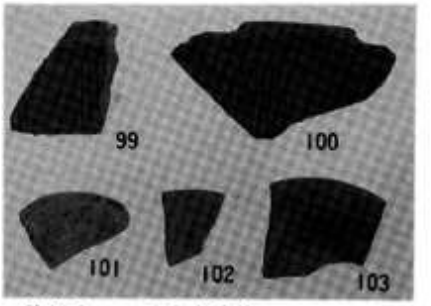
第9トレンチ出土遺物　80 越前鉢、81 同擂鉢、82 土師質皿
83～85 青磁碗、86 硯、87 近世、88 瓦

第9トレンチ全景（東から）



第10トレンチ出土遺物　89 越前甕、90 同擂鉢、91～96 近世
97 銅銭、98 パンドコ

第10トレンチ全景（東から）

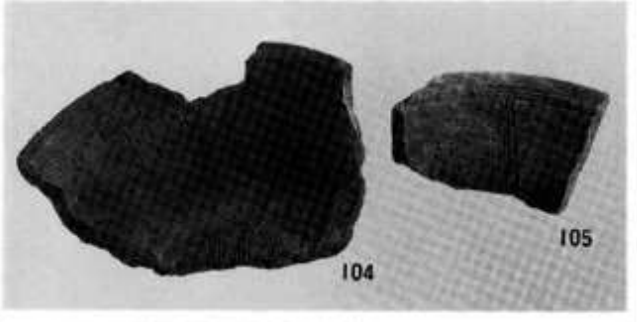


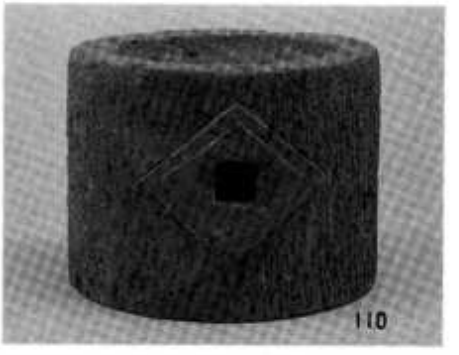
第11トレンチ出土遺物
99・100 越前擂鉢、101～103 土師質皿

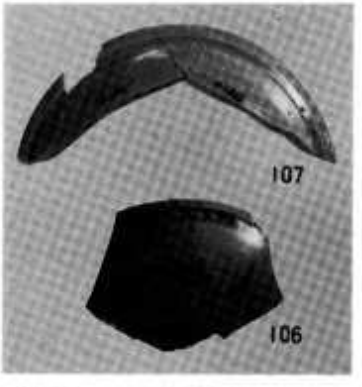
第11トレンチ全景（東から）

第12トレンチ　井戸

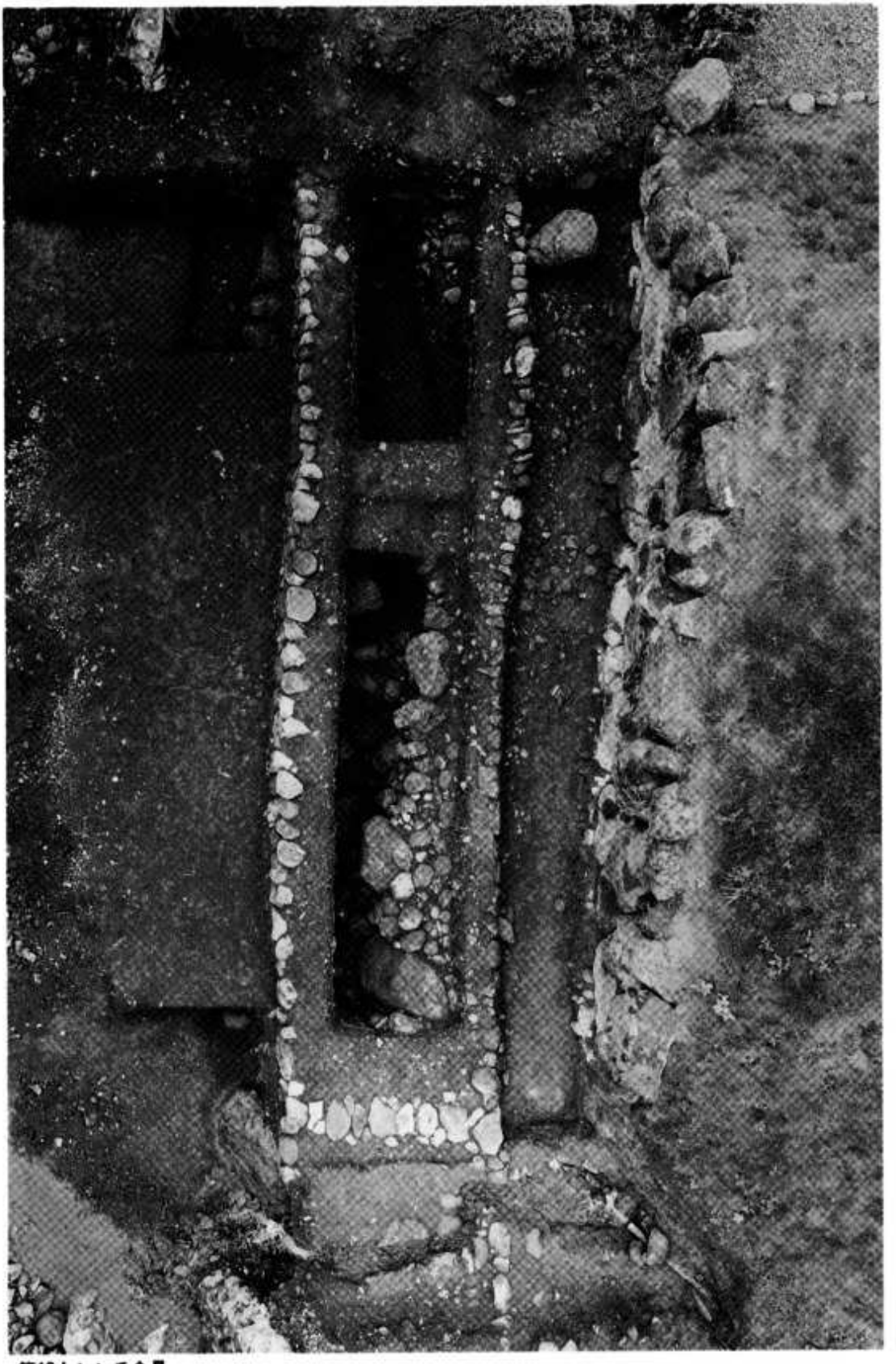
第12トレンチ全景（東から）







第12トレンチ出土遺物　104・105 越前擂鉢、106・107 染付皿、108 自在鉤、109 バンドコ、110 茶臼

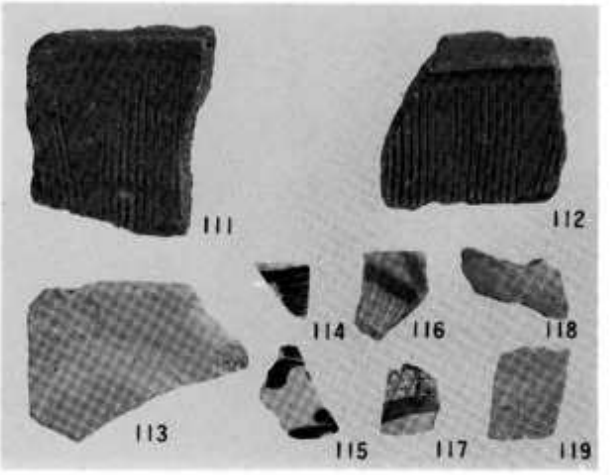


第13トレンチ全景

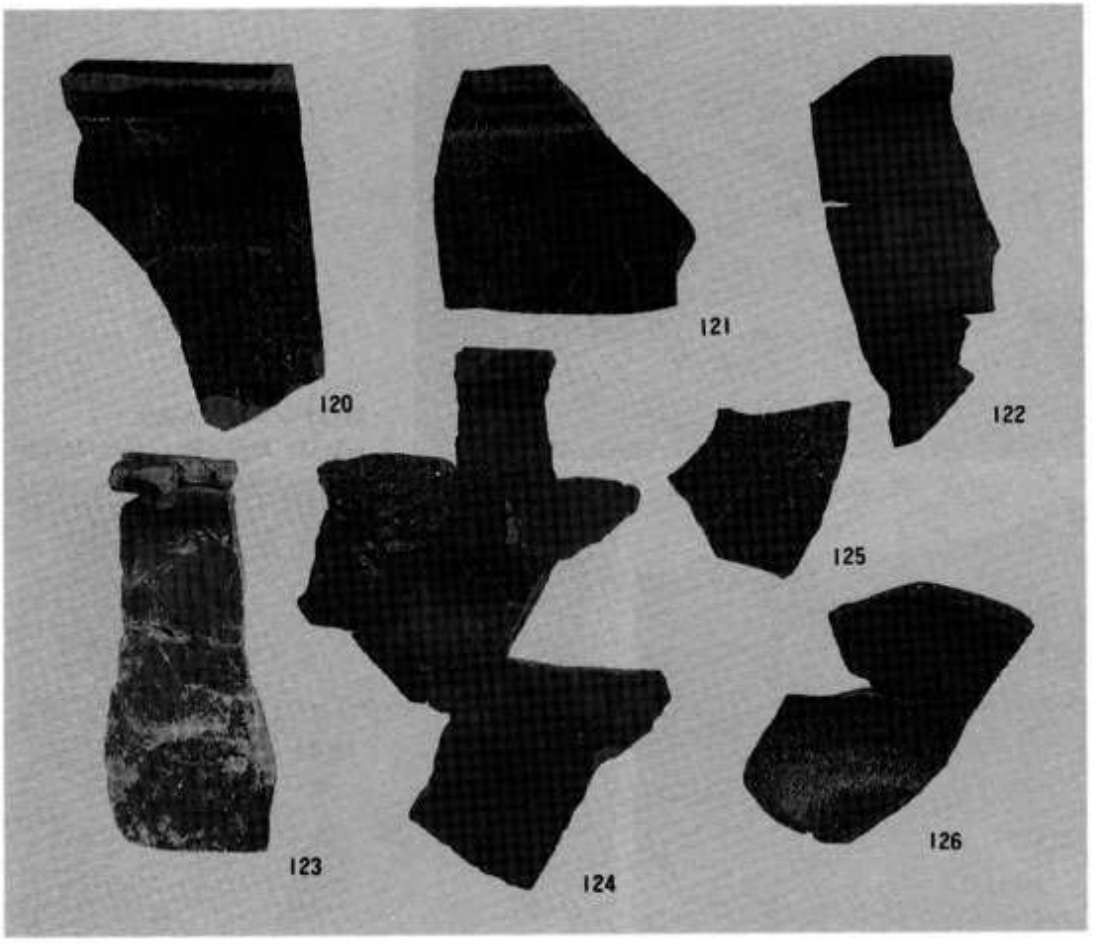
第13トレンチ全景（南から）

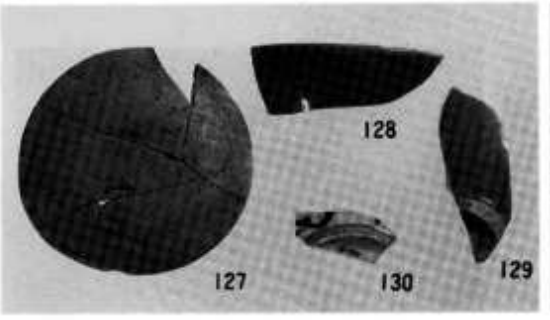
第13トレンチ出土遺物
111・112 越前擂鉢、113～119近世

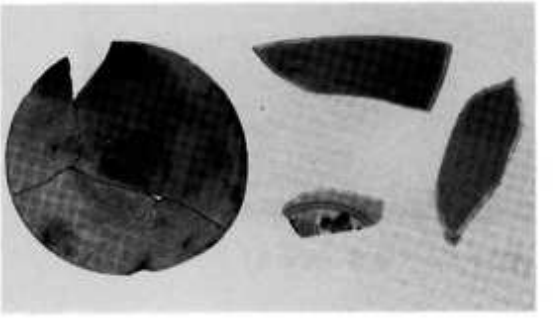
第13トレンチ全景（西から）



第14トレンチ全景（東から）







第14トレンチ出土遺物　120～125 越前甕、126 同鉢、127 土師質皿、128・129 青磁碗、130 染付皿

一乗谷朝倉氏遺跡

一乗谷川水辺空間整備事業に伴う事前調査報告

発行年月日　1991年3月28日

編集・発行　福井県立朝倉氏遺跡資料館©

印　　刷　河和田屋印刷株式会社